

小生が講じた内容がこれからの彼らの長い人生の中で、彼らの価値観に何がしかの痕跡を残すことを期待している。

大学における  
教育と研究

工学部 教授  
長瀧 重義



昭和38年12月に東京大学専任講師に任用されてから、東京工業大学助教授、同教授、新潟大学教授と続いた国立大学

今大学は何が求められ、何を追求すべきかを真剣に考えなければならないときにある。

# 退官

における教員生活も本年3月で終了することになっている。正確には38年4ヶ月の勤務であるが、この40年弱を振り返って見ると、皆様の御指導・御支援により一応の教育・研究の実績を残せたのではないかと考えている。しかし、大学において「教育」と「研究」は、時に相反し、時に相互助長する代物である。特に近年の大学に見られるように、自己点検、外部評価を実施したり、或いは最近のTOP30により大学間の競争を迎える時代になると、特に「教育」と「研究」の関係がより複雑化かつ錯綜化することになると思われる。

以前、若い大学人から教育と研究の比重の置き方について問われたとき、筆者は大学にあっては、勿論両方必要であり、かつ教育に対する比重は50%以上であるべしとの意見を述べてきたし、この考えは今でも変わらない。しかし大学における教官の評価が「教育」に対して十分になされていたかという決して

そうではなかった。今大学は何が求められ、何を追求すべきかを真剣に考えなければならないときにある。旧態依然の組織、人事、教育、研究を行ってはいは、近い将来淘汰されることは間違いない。今こそもう一度大学における「教育」と「研究」を考えてみようではありませんか。

5年間を振り返って

工学部 教授  
村山 良昌



5年間ではあったが、一度はやってみたかった教師稼業を楽しむことができたことは、望外の幸せであった。招聘して戴いた当学科および工学部の諸先輩に心から感謝する。

この間に、専門教育や研究の面はともかくとして、たまたま前任者から後を引き継いだ教養教育の科目が忘れられない。「エネルギーと社会」と題して、人類の生存の根幹にかかわる諸問題、エネルギーのみではなく、人口、食糧、資源、環境などを幅広く論じ、えてしものごとを真剣に考えない1,500人を超える若者に、自分の問題として考えてもらえたことは、それなりに有意義であったのではないかと密かに自負している。Reportも幾度も書いてもらった。その内容が、たとえ「こまめに電気のスイッチを切るようになった」程度のことではあっても、小生が講じた内容がこれからの彼らの長い人生の中で、彼らの価値観に何がしかの痕跡を残すことを期待している。

「発展」が「量的な拡大」を意味する時代は終わった。新潟大学の真の発展、即ち、質的な充実を衷心より願っている。

最後に、これからの大学運営は困難を極めることが予想されることから、新学長の下で、方向を誤らず、適正な指導性が発揮されて、ますますその存在が世界に認知される大学になってほしいと望んでいる。

今後は、人類の将来に想いを馳せながら、静かに人生の幕引きの準備をして行こうと思う。それに、これまで同様大学教育に僅かな時間を捧げる予定である。

## 大学生活 28 年間

工学部 教授  
山崎 一生



世の中の役に立っているという実感を日々味わいたい

という願いを込めて新潟大学に赴任して 28 年が経過した（この願いは叶えられていない）。最初の約 10 年間は平穏であった。時代が平成に移る直前から大学を取り巻く環境が変化し、事態は一変した。「大学の改革」が始まったのである。第 1 は工学部における大学科制への移行である。1 学年の学生数が 100 人程度となり、教官と学生との関係が疎遠になってしまった。学生にとっても教官にとっても望ましくない出来事であったと思う。第 2 は博士課程の新設である。新潟大学にも博士課程を設置したいという先達の努力の結果、博士課程自然科学研究科が 1985 年に設置された。研究の充実が期待される場所である。第 3 は教養部の解体である。教養教育に全学部教官が関わることとなり、小生も新たな経験をすることができた。大学（学部）は教養を高める場であると信じているので、教養教育がますます充実することを期待する。改革の一翼を担わされて雑務に追われ研究を存分にできなかったことは心残りである。

総合情報処理センター長を務めた最後の 8 年間に世の中は急激に変化し、コンピュータネットワークが学内のインフラストラクチャとなった。学内情報基盤の更なる充実、並びに、維持管理の外注化は当面の最大の課題である。

「発展」が「量的な拡大」を意味する時代は終わった。新潟大学の真の発展、即ち、質的な充実を衷心より願っている。



**大学（学部）は教養を高める場であると信じているので、教養教育がますます充実することを期待する。**